

中北の地域社会 (COMmunity)の心の交流 (COMmunication)をめざします

## 若い世代に何を伝えるのか

中北地区地域教育推進連絡協議会

10月27日(木)に甲斐市双葉ふれあい文化館で、中北地区地域教育フォーラムが開催されました。甲府工業高等学校応援団の力強い演舞と、山梨県立図書館館長 金田一秀穂氏のユーモアあふれる講演でした。内容の一部をご紹介します。

### 甲府工業高等学校応援団

今回、演舞を披露してくれた応援団所属の11名。1・2年生の新しい体制になって初めての演舞ということで、当日は会場入りも早く、リハーサルも念入りに行いました。近年はコロナ禍で思い通りの活動ができない中、夏の高校野球大会では決勝まで熱い応援を行いました。今回も「中北地区の皆様へ」と、熱いエールをいただきました。

舞台裏での待ち時間も、礼儀正しく誰にでもさわやかな挨拶をする姿がありました。講演会の講師の金田一先生も、ホールの座席から演舞を見つめていました。



### ●応援団の皆さんへ(アンケートから)

- ・圧巻でした。前日に学校で練習しているところを見かけました。若い高校生のパフォーマンスに元気をもらいました。
- ・10年以上前の野球部の応援がよみがえってきました。これからも頑張ってください。
- ・気合いと迫力に感動しました。現代の高校生にこんな応援団がいるなんて知りませんでした。山梨県のみannaにもっと知ってほしいなと思いました。
- ・「一生懸命」「全力」というものは、こんなにも人の心を震わせるのかと感動しました。卒業生の姿も見られてうれしかったです。
- ・こんな時だからこそ、応援し合うことは大切です。
- ・高校生のみなぎる力ひしひしと感じ、自分もエールをいただきました。見られて光栄です。
- ・甲府工業の生徒の真剣さ、前向きさ、迫力に圧倒され、終わった今でも心躍っています。このコロナ禍、元気をもらった！！

### 金田一秀穂氏講演会

#### 20年したらどうなっちゃうだろう

(アトラクションの高校生の話から) 彼らはどんな時代を生きるのだろうか。あと80年生きる人に、どんな時代が待っているのか。AIの時代といわれ、最近ではコロナ時代の新しい言葉(「回らない寿司屋」や「有観客ライブ」)があふれている。「本」というと「紙ですか? デジタルですか?」と言われる。(裏へ続く)



## リモートは何かもの足りない

リモートで会議や講義をして、終わると「退出」を押す。その場で同時に顔が見えて声が聞こえる。早くて簡単で便利だが、何かもの足りない。それは何か。それは「気配」を感じないから。私たちは、コミュニケーションの原型として、会うことで気配を伝え合って何億年と過ごしてきた。「気配」を感じ「気配」を送っているんだと。これはリモートにはないことだし伝わらない。

## 考えることのよろこび

テレビ番組『はじめてのおつかい』で見られる幼児の独り言は正直でおもしろい。言葉は、自分で考えたり、感じたり、判断したりするために使うもの。知識を詰め込むだけならスマホでできるからこそ、言葉で考えさせたい。考えるよろこびは教育の場で大事なこと。

## 世の中の常識をひっくり返してみる

「努力は無駄だ。努力は裏切るぞ。」と、高校生に試しに話してみると、普段から努力を続けている生徒からいろいろな意見や考えが出る。「じゃあ努力って何？」って。例えば、「温暖化って悪いの？本当にそうなの？」と、世の中の常識をひっくり返して考えてみる。これは、教育の場でこそできること。様々考える。一辺倒の価値観に偏らず、いろいろ考える。

## 古典の力 本ができること

孔子や芭蕉など、古典から言葉が私たちに届いている。本は怒らない。やさしい。本は何度でも読み返せる。読んでいるうちに難しいものにつながる。考えることの大切さを、本は言葉をとおして手伝っている。次世代に生きる若い人の可能性を信じたい。



## ●講演後のアンケートから

- ・言葉の役割はコミュニケーションではなく考えるためにあるという言葉に納得しました。
- ・常識を今一度考えてみる。今の子どもたちにとって大切なことと思います。一緒に考えることのできる大人たちが増えることを祈りたいです。
- ・保育の中でも時間をかけて考えることをしていきたいです。ことばを一番はじめに覚える大事な時間だと再認識しました。
- ・効率だけでなく、考えることを大切にしたい学びが重要と思った。
- ・本を手に取り、自分のペースで、何度でも開いては閉じ、いろいろなことを感じてほしいと思いました。

## そして新たな100年へ

山梨県立韮崎高等学校

創立100周年の山梨県立韮崎高等学校（今村勇二校長）は、9月21日、記念式典の日を迎えました。厳かな中に温かみのある雰囲気包まれた体育館に、全日制・定時制の在校生の他、県内各所から100名に近い来賓の方々を迎えました。特別感謝状を贈呈された大村智先生の講演では、重みのある一言一言を聞き逃さないようにと、生徒の皆さんはじっと耳を傾けていました。



午後からは会場を東京エレクトロン韮崎文化ホールに移し、中田英寿さんの記念講演が行われました。「できることをするのではなく、好きなことをすることの意味」や「疑問を持って意味を持ってやるのが大事」など、中田さんから投げられた言葉が、生徒の皆さんの刺激となりました。

先輩から後輩へと、直に大切な物が受け継がれた貴重な時間。何十年後、後輩の前に立つ人物がこの会場にいるに違いない。そう思わせる一日でした。



蕪崎市子育て支援センターでは、蕪崎高校の生徒と市内の幼児が関わる企画を続けています。家庭科の科目の1つ「子どもの発達と保育」を選択している生徒が年6回、子育て支援センターとともに活動して「生きた保育」に接しています。今回、9月の「おかいものごっこ」と11月の「蕪崎高校へ行こう」取材しました。



### おかいものごっこ

生徒が制作した手作りおもちゃは、フェルトでつくったハンバーガー、ペットボトルと新聞紙でつくった輪投げ、さかな釣り、ボーリング。

素材で五感を刺激する手作りおもちゃ。見た目や肌触りも気にしながら、子どもたちがわくわくするようなおもちゃを持ち込みました。お気に入りのおもちゃで遊ぶ子どもたちを見て、生徒たちも満足げです。

「触ったときの感触や安全面も考えて手作りしました。キラキラ光るものを入れると子どもの反応がいいとか、子どもの手にあう大きさにつくるなど、授業の中で試行錯誤しておもちゃを完成させました。」（参加生徒）



目が合うたびに子どもに泣かれてしまう高校生に、「大丈夫だよ。」「慣れたら泣かなくなるよ。」と、ママから経験に基づくアドバイスもありました。

「コロナ禍であちこちに依頼していた保育実習が難しくなりました。子育て支援センターとの協力で、幼児と接する機会を持てたことは大変貴重です。」（蕪崎高校家庭科担当教諭）

### 蕪崎高校でおもてなし

パパやママが、子どもを連れて蕪崎高校を訪問しました。玄関で出迎えた生徒の皆さんは、子どもたちと手をつないで部屋へ案内しました。

笑顔と大きなかけ声で、体操や手遊びをする生徒。流行のダンスになると、ノリノリのリズムに、子どもたちも大はしゃぎ。



「人見知りしてお母さんから離れない子や、思うようにならないことが多くて大変でした。」

「お母さんとのつながりの強さを感じました。」

「練習ではうまくいっても、実際は問いかけ方が難しかった。」

「短かった。もっと長い時間、子どもたちと遊んでみたいです。」（参加した高校生）

「（子どもが）最初は緊張していたけど、お兄さんやお姉さんに慣れてくれて楽しくしていた。よかったです。」（参加したお母さん）

「これまで学んできた乳幼児の特徴や年齢ごとの発達の様子を、直に体験できるよい機会です。子どもにおはなしする時に、どんな声で、どのくらいの早さで伝えるとよいのか、実際にやってみて難しさも感じたと思います。お母さん方からも、子育ての楽しさや大変さ、お子さんそれぞれの接し方をうかがうことができたと思います。」（家庭科担当教諭）

「過去には、高校生だった子が親になって、『になら★ちび』に来てくれたこともありました。地元を一度離れても、蕪崎に帰って子育てをする。そんなつながりが地域を元気にすることを実感しています。」（子育て支援センター担当者）

高校生が子育ての実際を体験するだけでなく、将来の地域づくりにつながる取り組み。来年1月には、ちびっこはうすの内藤香織理事長が、子育てについての講演をします。



郷土に興味・関心を持ち、研究に取り組んだ成果を表彰する「第15回ふるさと山梨郷土学習コンクール」の表彰式が、10月21日、山梨県総合教育センターで行われました。地域を知り、湧き上がる疑問に取り組んだ内容は、大人では気がつかない観点からのアプローチもあり、審査した先生方も山梨の魅力を再発見していました。調査・研究を着実にやり遂げた、受賞者の皆さんの満足感あふれる表情が印象的なひとときでした。



## 受賞した皆さんの感想

「難しいことを恐れずに挑戦する。」

「いつも見ている風景にたくさんの知恵や努力が詰まっている。」

「自分の命を守ることはふるさとを守ること。」

「自分を支える言葉の大切さを知った。」

中北地区では「学校奨励賞」を、双葉東小学校、長坂小学校、韮崎西中学校、若草中学校、甲陵中学校、山梨大学教育学部附属中学校が受賞しています。

入選作品のうち、ふるさと山梨大賞・優秀賞受賞作品は、令和5年1月2日から2月20日まで山梨県立博物館に展示予定です。ぜひ足を運んでみてください。

「ふるさと山梨」

デジタルブック小学校版→



「ふるさと山梨」

デジタルブック中学校版→



## #中北バトン

このたび、板山國夫様は、社会教育の振興に功労があった方に贈られる、令和4年度文部科学大臣社会教育功労者表彰を受賞しました。

## これからの社会教育に思う

北杜市社会教育委員会議 議長 板山國夫

社会教育は「何でもあり」といった大先輩の言葉が思い出される。確かに多岐にわたっていて一言で言い表すことは難しい。

社会教育ってよくわからない。生涯学習はやりたい人がやればよく、趣味のようなものとイメージする人も少なくない現状をどう変えていくか課題といえる。

このような中で、「社会教育って」と考えるとき、生涯をとおして健康で文化的に、そして、幸せな生活を送るための基盤である、「人づくり」「つながりづくり」「地域づくり」の基になるもの。それが社会教育と考える。これからは、開かれた、つながる社会教育の実現を目指して行くことが一層求められる。

そのためには、「ソーシャルキャピタルの醸成」ということも大切であると考え。いろいろな社会資源、人的資源などを取り込み、「つながりの輪」を広げていくような活動も必要ではないだろうか。公民館を中心に、これまで培ってきた地域との関係を生かしながら、実態に応じた学習活動などを結びつけ、地域づくりに繋げていくことが大切と考える。

また、地域と学校の連携、協働の推進も期待されている。地域の人的・物的資源を活用、社会と共有、連携しながら地域全体で子どもたちの成長を支え、地域を創生する活動の展開を図ることも求められている。すでに北杜市内でも「コミュニティ・スクール」に数校取り組んでいる。

コロナ禍での社会教育のあり方、コロナ収束後、新生活様式の下での社会教育のあり方について、「社会的包摂」ということを常に念頭において、みんなで知恵を出し合い考えていくことが期待されている。